

[書評] 杉原四郎著 『マルクス経済学への道』

著者	大島 雄一
雑誌名	関西大学経済論集
巻	17
号	3
ページ	467-473
発行年	1967-09-25
その他のタイトル	[Review] S. Sugihara, Introduction to Marxian Economics, 1967.
URL	http://hdl.handle.net/10112/15261

書 評

杉原四郎著 『マルクス経済学への道』

大 島 雄 一

1

本書はその名から知れるように、マルクス経済学への1つのガイド・ブックであり、杉原氏が、『経済学史講座』などに書かれた独立論文に新たに一篇を加えて集成したものである。内容は4章と2つの附論からなっている。

本書の狙いは、著者によれば2つある。1つは、「マルクス主義ないしマルクス経済学に漠然たる興味を抱いた人々が、すすんでマルクス経済学を本格的に勉強しようとする場合に役立つ予備知識を提供する」ことであり、いま1つは、その場合に「青年マルクスがどうしてもそもそも経済学の研究を志ざし、長いけわしい道をたどって『資本論』体系をきずき上げるにいたったかのあらましを説明する」ことである。著者は、「社会主義思想と経済学の内面的結合」という点にマルクス主義ないしマルクス経済学の独自性をみとめ、その観点から、「経済理論の体系全体とそれを貫ぬく思想の重さ」を読者に印象づけようとしている。こうした観点からするマルクス経済学の形成史の研究は、もともと氏の本来の研究テーマであるから、本書も、一方では、ガイド・ブックとしては、「ヘーゲル法哲学批判序説」・「経済学批判大綱」から『資本論』にいたる、マルクス・エンゲルスの主要著作と、史的唯物論、労働疎外論、価値・剰余価値論、恐慌論等々のマルクス主義の基本命題の簡潔な解説をあたえるものとして、初学者に有益であろうし、また他方では、氏の独特の観点から照射された、マルクスの経済本質論、資本主義観等々が浮き彫りされており、そうした点で専門的にも興味深い叙述を多く含んでいる。本書の問題領域からいえば、それは氏の前著『マルクス経済学の形成』とほぼ重なり合っているのだが、内容的には、たとえば『賃労働と資本』のマルクス経済学形成過程での位置づけなど、前著で余りふれられなかった側面が追求されており、前著と補い合うものとなっているといえよう。

2

各章についてみれば、第1章「マルクス経済学への道しるべ」は、文献紹介をかねた、いわば新入生ガイダンスなのであるが、ここでは、「人間のいっさいの活動の基礎は生産的労働を中軸とする経済活動であり、経済活動を規定する法則を解明してはじめて歴史的社会的諸現象を科学的に把握することができる」(p. 14)という観点から、マルクス主義における経済学の占める規定的意義が強調されている。そうして、そのような方向への入門書として、唯物論哲学からの道、日本近代史研究からの道、経済学史からの道をあげ、それぞれ、梯明秀『資本論への私の歩み』、服部之総『近代日本の成り立ち』、内田義彦『経済学史講義』が推奨されている。もちろんこれは、著者自身いわれるように、その「個人的体験に裏打ちされた」ガイドであるのだが、マルクス主義における党派性と科学性が、「労働過程における自然認識」に媒介された生産的労働の主体の観点から理解するべきであり、この労働観をつうじての弁証法的唯物論が、「史的唯物論という社会構造と歴史の発展にかんする一般理論」に展開され、さらに古典経済学批判をつうじての資本主義分析——このばあい、氏はとくに資本蓄積論においてこそ経済学が「ある時代の具体的問題と直接にかかわり合う」という観点に立つが——に具体化されるのだ、という氏の基本的観点をそこに読みとるべきだろう。

第2章から第4章が本書の主内容をなしている。

第2章「万国のプロレタリア団結せよ」は、「マルクスの生涯とその時代」という副題のもとに、ボンおよびベルリン大学で法学および哲学を学び、『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』によって学位をとって大学教授たらんとしたマルクス、またバルメンの紡績業者の息子で早くから資本家的経営者としての実務修行をしながら、兵役期間中にベルリンで進歩的インテリゲンチヤと交流したエンゲルスが、『ライン新聞』の主筆として、またマンチェスターの紡績会社での実務経験をとおして、次第に社会主義者となり、経済学の本格的研究に打ち込んでゆく道程が追跡され、さらに、『資本論』に結実したマルクス主義とマルクス経済学が、国際労働者協会(第1インター)をとおして、ヨーロッパ的規模での労働運動の団結を実現しつつ、その指導理論として影響力を高めてゆく経緯が簡潔に跡づけられている。

ここでは第一に、マルクスの『ヘーゲル法哲学批判序説』とエンゲルスの『経済学批判大綱』が、また『経済学・哲学手稿』と『ドイツ・イデオロギー』が重視され、変革の主

体としてのプロレタリアートの発見、労働疎外論の確立をつうじての経済学的重要性の認識が強調され、史的唯物論の「骨子」が、(1)土台による上部構造の究極的規定性、(2)生産力と生産関係の矛盾による体制転換、(3)奴隷制・封建制・資本制という階級社会の発展段階認識の三点にしぼって説明され、第二に、『賃労働と資本』の解説をつうじて、労働力範疇の認識による剰余価値論の体系化がマルクス経済学形成にもつ決定的意義および資本主義の基本矛盾の爆発としての恐慌認識とその革命にたいする促進的効果についてのマルクスの強調が浮き彫りされている。さらに第三に、マルクスによる国際労働者協会の『創立宣言』の解説をつうじて、10時間労働法にみられる労働時間の短縮の意義が「労働者がほんとうに時間の主人となって社会的先見による社会的生産をおこなうための第一歩」(p. 72)という点に見られ、また第1インターの「歴史的意義」が「マルクス主義がヨーロッパ労働者階級と結びつく媒体となった」点に求められている。

第3章『『資本論』への長いけわしい道』は、『経済学史講座』第2巻に「マルクス思想体系の形成」として発表された論稿であるが、ここでは「経済学者マルクスのあゆみ」という副題が附されている。本書の諸章はもともと独立論文として書かれたものであるから、各章に内容的な重複が生ずるのは止むを得ないことかも知れない。第3章も第1節「科学的社会主義思想の形成」、第2節「経済学批判体系の形成」という二部分より成っているが、前半は第2章と、後半は第4章と部分的に重なり合っており、また他面では補い合うものとなっている。

第1節では、主として1840年代の展開が追跡されている。まずはじめに『経済学・哲学手稿』での「理論的中核」をなす労働疎外論が立ちいって解説され、そこに「史的唯物論とそれに基礎づけられた科学的社会主義とに成長すべき思想的端緒」(p. 95)がみいだされる。しかし、ここではまだ、人間本質論から一足とびに賃労働者論がとりあげられるといった、歴史の発展理論に十分に基礎づけられていない疎外論であり、また経済学的にみても、資本制生産の無政府性と不安定性が「産業資本の剰余価値追求運動そのものに内在する矛盾を根幹とする」といった「全機構的把握」に支えられてはいないことが指摘される。これにつづく『ドイツ・イデオロギー』においては、疎外論は一層深化され、「分業の本質を人間の類的活動の疎外形態」ととらえることにより、それは分業論さらに生産力の発展段階論へと展開され、ここで「原始社会から現代にいたる経済発展の基本線」が明瞭に示される。これによって、「広義の経済学の基礎理論たる史的唯物論」の成立と「資本主義経済の歴史的特質をよりの確に把握しうる分析視角」(p. 108)の設定が可能にな

り、ここに『ドイツ・イデオロギー』の学史的意義がみられるだろう。そうして、この基礎のうえで、それに続く経済学研究——『哲学の貧困』と『賃労働と資本』がその成果——によって、価値論の意義、剰余価値論の「実質的核心」が認識され、蓄積過程での産業予備軍の理論の「先駆」的展開が可能となったのである（p. 110）。氏によれば、こうした1840年代の研究の総括的成果をなすのが『共産党宣言』であり、それについては、とくに2つの点が、第1には、史的唯物論と階級闘争論との関連、より具体的には、資本主義から社会主義への転化にあたっての、階級闘争とプロレタリア独裁の必然性についてのマルクスの指摘と、第2には、社会主義への転化のための主体的客体的条件の認識としての経済学の意義、氏の言によれば「哲学的世界観とプロレタリア革命論とを媒介する地位を占める経済学は……具体的には恐慌論をつうじて革命的経済学となる」（p. 119）という、その実践的性格とが強調的に説明されている。

第2節では、1850年9月以降ブリティッシュ・ミュージアムでの研究にはじまり、60年代の『資本論』にいたる、経済学批判の準備期が扱われる。この時期は、1850年秋から1856年秋までの、「マルクスが自己の理論体系の基礎がためを古典学派の批判をつうじて推進してゆく準備期」＝「第1期」、1856年秋から1859年2月までの、「経済学批判の全体系の大綱を描くとともに、その最も基本的な部分の公刊にまでこぎつける建設期」＝「第2期」、さらに1859年2月から1862年末までの、「本論的部分の仕上げの過程でその理論内容に一層の深化と拡充が行なわれ、かくて経済学批判体系が資本論体系へと発展せざるをえなくなる過渡期」＝「第3期」に分けられる。このそれぞれの時期は、文献的には、1850年9月から53年8月までの、未公刊の全24冊の研究ノート、1857年8月から58年6月までの、現行『経済学批判要綱』と59年6月の『経済学批判』、さらに1861年8月から1863年7月までの、『剰余価値学説史』がそこに含まれる23冊のノートが成果として残されているのであるが、氏はこれらについて簡単に解説しながら、各時期の経済理論の展開と経済学批判体系の方法・プランの進展を跡づける。

ここで氏がとくに力点を置いているのは、第2期にかんする、第1に、経済学批判体系の基本構想を支えるものとしての、マルクスの雄大な資本主義観について、第2に、『資本論』体系への展開の軸をなす剰余価値論の完成についてであろう。前者は、『要綱』の「貨幣にかんする章」において簡単に述べられ、いわゆる『先行する諸形態』の基本的視点をなしているかにみえる、「世界史の三段階論」を指している——そこでマルクスは、資本主義社会を世界史の「第二段階」（『要綱』p.76）とし、「人類の局地的発展と自然崇拜とし

て現われるにすぎない」「それ以前のすべての段階」＝「第一段階」を根底から破壊する「資本の偉大な文明化作用」（同上 p. 313）を強調し、かかるものとしての資本制社会を人類前史の最終段階として、恐慌と革命に媒介されての、「諸個人の普遍的な発展」と「自由な個性」のうえに立つ、「第三の段階」への移行を示唆する。氏は、かかるマルクスのヴィジョンを十分に把握しなければ、壮大なマルクス体系の「魂にふれる」ことなど到底不可能であると強調する（p. 138）。後者、剰余価値論については、『批判』さらに『要綱』「資本にかんする章」において、労働の二重性、労働力と労働の区別、不変資本・可変資本、価値移転と価値創造等々の、剰余価値論展開のための基礎概念がすべて出揃うことが指摘され、上述の「マルクスの資本主義観も剰余価値論の裏付けをえてはじめて確固たる経済学的内容をあたえられる」（p. 146）点に注意が払われている。

さらにつづいて、第2期での飛躍的な理論展開にもかかわらず、そこでは資本蓄積論が未成熟であったこと、流通過程論が十分整理されていないことが指摘され、これらの整備が第3期の課題となるのだが、他方、生産過程論に属する剰余価値の理論史が、古典派批判をとおして必然的に利潤・地代論の積極的展開を促進させることになり、当初の「資本一般」構想での「資本と利潤」の項が、『資本論』体系での「総過程」の分析へと脱皮を迫られる所以が明快に説かれている。

第4章「『資本論』体系のあらまし」は、ありきたりの『資本論』の解説ではなく、氏の観点からの『資本論』の読み方の提示とでもいった内容である。つまり「人間解放という実践的課題とむすびついた彼の経済本質論」ないし労働論、「これを抜きにして『資本論』体系の論理構造をいくら精密にたどってみても、それはマルクス経済学の最も大切な魂を見失うことになる」という、氏の基本的観点に立って、「経済本質論 → 広義の経済学 → 『資本論』体系」という思考序列を設定し、その線上で、『資本論』の範疇展開とその編成が「実質的には……恐慌論体系として把握することができる」（p. 183）という点を氏は強調する。そうして、未完の最終章「諸階級」は、もしそれが完成されれば、「おそらく……恐慌と革命と階級闘争との関連を論じることによって、全体系プランの最後に位置する、「Ⅵ. 世界市場」への理論的伏線をはったにちがいない」（p. 186）のであって、そのことによって、マルクス経済学の「恐慌と革命の経済学」としての実践的性格を明示すべきものであったろう、とされる。これが氏の『資本論』体系理解の結論部分をなしているのだが、それはまた本書に一貫してつうずる氏の経済学本質論ともいいうるであろう。

3

以上、巻末の2つの附論——その1つは『資本論』の諸版本・邦訳についての考証であり、いま1つは清水幾太郎『現代思想』によせた評論であるが——を除いて、本書の主要な内容を紹介してきた。本書はもともと入門書として書かれているのだから、そうした点からみれば、平易明快な叙述と広い問題視野によって、冒頭にふれた著者の狙いは十分成功しているといえよう。やや気になる各章間の内容的重複も、教育的見地からは却って積極的な効果をもつともいえそうである。

とはいえ、本書はたんなる入門書というだけでなく、専門的にも興味深い論説をふくんでもいる。さいごにそうした点についての評者の感想を2、3述べさせていただければ、第1に、著者は一貫してマルクス経済学の実践的性格・社会主義思想との内面的結合を強調されるのだが、そうしてそれについては評者も全面的に賛成なのだが、他方では、その強調が逆に資本主義分析の理論—分析用具ないし分析技術としてのマルクス経済学の客観性—普遍妥当性の軽視に傾きはしないかがやや心配でもある。というのは、一方でマルクス経済学のイデオロギーからの「解放」が有力な潮流としてあると同時に、他方ではヴィジョンはマルクス、ツールは近経といった、旧ランゲ流のマルクス経済学論が同様に根強く存在するのであり、これにたいしては、帝国主義論・一国資本主義分析さらに再生産論・国民経済バランス論へと展開する、マルクス経済学のいわばツール性が強調さるべきだからである。本書ではこちらの発展方向への示唆があまり印象づけられないのがやや不満に感じられる。第2に、著者は、マルクスの資本主義観として「世界史の三段階論」(p.136)を強調される。これの強調は著者の慧眼を示すものであり、評者も賛成であって、この観点はより深められ多面的に適用さるべきだと思われる——たとえば原蓄論、社会主義経済論などにも。ただしこの観点のもとでは、資本制以前はすべて世界史の第1段階に入るのだから、各生産様式はそれ独自の生産力と生産関係の矛盾をもち、歴史はその継起的発展として現われるといった、通例的な発展段階論のもつ意味が再検討されねばならないだろう。この点で興味深いのは、世界史的観点の強調の上に書かれたベルギーの E. Mandel; *Traité d' Economie Marxiste* (1960) が方法的に「発展段階論」*théorie des stades successifs* を否定していることであり、さらにソ連『経済学教科書』が初版(1954)以来この点でなしくずしに改変されていることである。著者の強調はこうした点への問題展開を示唆するものといえるだろう。第3に、著者は、マルクスの「経済本質

論「労働時間論」を独自の視点から強調されるのだが（p. 180）、この著者の観点は、たとえば価値論の諸問題にどのような照明をあたえるのだろうか。この観点は、河上肇氏のいわゆる「価値人類犠牲説」に一脉相通じ、また白杉庄一郎氏が共産主義社会に価値範疇の存在を認める場合の根拠をもなしていると思えるのだが、そうして評者も杉原氏の強調に共感するのだが、その上で、こうした点についての著者の考えをいずれ機会を得て伺いたいものである。これらが評者が関心をもった問題点であり、また感想である。

（未来社，昭和42年5月刊，B6，208ページ，580円。）